



放課後のパンスト

生徒会長の秘め事



矢神千尋

やがみちひろ

私立 星蘭学園
2年B組
生徒会長

せいらん

私立 星蘭学園



学生証

姓名 : 矢神千尋
学生番号 : 23-267

〒263-0052
千葉県千葉市桜峰区楓町3丁目12番8号

放課後のパンスト

〈生徒会長の秘め事〉

Scene.1	4
Scene.2	6
Scene.3	18
Scene.4	23
Scene.5	26
Scene.6	39

Scene.1

「それじゃあ、今日はここまでにしましよう。みんな、お疲れさま」

生徒会長・矢神^{やがみちひろ}千尋は、手に持った書類をトントンと机の上で整え、生徒会のメンバーに声をかけた。

季節は十一月初め、日が暮れるのも早くなり、窓の外はもう薄暗い。先の文化祭の後処理関係も一段落したところで、生徒会としての大きな仕事は春の新入生歓迎とずいぶん先になる。

「はい、それじゃあお先に失礼します」

「お疲れさまでした」

「お疲れさま」

副会長、会計、書記の面々はそれぞれに声をかけ、生徒会室を出て行った。

「ふう……」

千尋は軽く息を吐く。長い黒髪を持つ才色兼備の美少女だ。成績優秀、品行方正、真面目^{まじめ}で

堅物なために気が強く見られるが、生徒からの人気は高く教師からの信任も厚い。

生徒会メンバーが部屋を出て行ってから数分間、千尋はそのまま会長の席に座り続けた。

まぶた 瞼を閉じて耳を澄まし、人の気配を探る。なぜか少し呼吸が荒く、落ち着かない様子だった。

千尋は周囲に自分以外の気配が感じられないのを確認すると、右側一番上段の机の引き出しにポケットから取り出した鍵を差し込む。

そこはこの木製デスクで唯一鍵をかけることの出来る引き出しだ。鍵を開けた千尋は引き出しの中からあるモノを取り出した。

それは楕円形だえんけいのカプセルのような部品から、コードが伸びて小さなりモコン状の物つなに繋がっている機械だった。

「はあ……」

吐息一つ、千尋はリモコン状の機械を操作する。すると、コードに繋がったカプセルのようなものが千尋の指の間で微細な振動を放ち始めた。

軽く脚を開くと、千尋はチェック柄のスカートをまくり上げた。パンティーストッキングの薄い布越しに、白い下着が透けて見える。

千尋はそろそろと腕を動かし、指の間で震えるカプセルを自分の股間に押し当てる。



「っあ……」

その身体が小さく震え、艶のある声を漏らした。千尋の指がゆつくりと上下に動く。震えるカプセルはストッキングと下着越しに彼女の肉の割れ目に埋まる。

千尋はリモコンで振動の強さを徐々に上げていく。荒い吐息と艶めかしい声なまが漏れる。

千尋が手にしているのはいわゆるアダルトグッズ——ピンクローターだった。

この、放課後の生徒会室での自慰行為が最近の千尋の秘ひそかな楽しみだ。

ことの初めはひと月ほど前、廊下でこのローターを拾った事だった。

透明のプラスチック製ケースからは中身が見え、それは千尋が見たことのない物だ。

好奇心からその機械の用途を調べてしまい、いけないこととは思いながらも自分の身体で試してしまう。

それまで性的なものにやや嫌悪感を抱いており、自慰もしたことのない千尋はその快楽にハマってしまった。

なぜわざわざ学校で自慰行為に及んでいるかという点、かなり裕福な千尋の家では専属のハウスキーパーを雇っている。彼女の自室もハウスキーパーが定期的に掃除をしているので、ローターが見つかる危険があるためだ。あいにく自室の机には鍵がかからず、安全な保管場所がない。

「はぁ……あぁっ……んんっ」

ローターの振動が千尋の一番敏感な部分——クリトリスを刺激する。瞼を閉じ、身体に駆け巡る快楽だけに堕ちていく。開いたワイシャツの胸元から下着の中に手を入れ、自分の胸と乳首をもてあそぶ。

「あ、あ、くうるっ……あぁっ、んんんんっ、あぁっ」

ほぼ人が居なくなつた放課後とは言え、さすがに校舎内という場所から、声を抑えながら千尋は絶頂を——

ガチャリ。

その寸前、いきなりドアが開いて会計の厚木大智あつぎたいちが現れた。

とは言え、高まつた身体は止めることが出来ない。

「いつ、やつ、やつ、やぁっんんんんっ」

千尋は大智の前で絶頂を迎えるのだった。